

Title	再び「価値法則と社会主義社会の問題」に寄せて
Sub Title	Second thought on the problems of the law of value
Author	中山, 三郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1948
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.41, No.10 (1948. 10) ,p.599(45)- 606(52)
JaLC DOI	10.14991/001.19481001-0045
Abstract	
Notes	学会展望
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19481001-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ところで以上に述べたような動的なオーバータイムの極大については、われわれはまた一數年來一貫した勞作を發表してあげてあるテイントナーの貢献をも看却してはならぬであらう。この問題にかゝる彼の論文は、「ホーグーティムの效用極大化」(Gerhard Finster, The Maximization of Utility over Time, *Econometrica*, April, 1938)、「動學的需曲線の理論的導出」(The Theoretical Derivation of Dynamic Demand Curves, *Econometrica*, October, 1938)、「需曲の動學理論に於ける支出弾力性」(Elasticities of Expenditure in the Dynamic Theory of Demand, *Econometrica*, July, 1939. 同論文テイントナーの文献の1つ)は、山田勇助教授「動態理論に於ける個人的需曲函数」國民經濟雜誌第六十九卷第一號を参照せよ)などにはじまひ、「主觀的危險及び不確實性の下の於ける選擇理論」(The Theory of Choice under Subjective Risk and Uncertainty, *Econometrica*, July-October, 1941)、「選擇の非靜學理論」(S. 密與) (A Contribution to the Non-Static Theory of Choice, *Quarterly Journal of Economics* February, 1942)、「生産の非靜學理論」(S. 密與) (A Contribution to the Non-Static Theory of Production, in *Studies in Mathematical Economics and Econometrics; in Memory of Henry Sc-*

hultz, 1942) の多きに達してゐるが、とくに一九四〇年以後の論文は豫想要因の理論的處理に關して注目すべきものを包蔵してゐる。およそひとびとが將來にかゝる豫想をたてる場合、そこには多かれ少かれ主觀的な不確實性を相伴するのが通常である。即ち一般に彼等のたてる豫想は必ずしも一值的ではなくして多值的であり、それらの數値には夫々ある確率が對應してゐるのが通常である。ところでピツクスにあつては、かゝる確率分布そのものは直接に問題とされず、豫想價格はその確率分布の中の最大確率値から不確實性の大小に従つて考慮された危険プレミアムを差引くことにより一應一值的なものに還元された (*ibid.*, pp. 124-125)。モザック、ランゲにあつてもこのことは同様である。モザックは個人をしてあたかも豫想價格の確率分布そのものに對するが如くに行動せしめるエニョクな代表的豫想値を假定したし (*ibid.*, pp. 129-130)。ランゲもまた確率分布の分散度の大小によつて危険プレミアムを酌量し彼のいはゆる有效豫想價格への還元を行つた (*ibid.*, pp. 29-32)。テイントナーの所論が注目されるべき理由は、彼がこの點に關して主觀的危險や主觀的不確實性の要因をヨリ立入つて考察し、かゝる確率分布そのものを積極的に處理しようとする興味あるところのみへの志向を表明してゐることに胚胎するのである。(一九四八・九・一五)

學界展望

再び『價值法則と社會主義社會の問題』に寄せて

中山三郎

スターリンによつて提起され、レオンチェフ・オストロヴィチヤノフ・アトラス等のソヴィエトの經濟學者達によつて採り上げられ、更にアメリカに於て「New York Times」(April, 2, 1944. July, 2 & 3, 1944), "Science and Society" (Spring 1944, vol. VIII No. 2), "American Economic Review" (Sept., 1944 vol. XXXIV) 等によつて紹介され、Raya Dunayevskaya, Carl Langer, Barran, Lange, Otis Rogin 等の論ずるところとなり、更に我國にも都留重人氏によつてその米國版が紹介された此の問題に就ては、屢々拙稿に於ても述べた如く一時の日本のジャーナリズムを賑わせ、「ソヴィエト經濟學に新なる段階を設定するに至つた」(拙稿)「價值法則と社會主義社會」の問題に寄せて「三田學會雜誌

・四一巻一・二合併號)かの如くに解釋された。これは次に述べる様に、アメリカ經濟學界の誤解とそれを無批判に直輸入された都留氏の紹介の不備に外ならない。先づ我々は、最初に「新なる段階を設定するに至つた」と言ふ言葉の意味を検討することによつて、この問題提起がソヴィエト經濟學の問題史的發展過程に占める意義を明らかにせねばならぬ。というのは此の問題提起は、ソヴィエト經濟學に劃期的一大轉換を齎すものであるとか、或は又經濟學教程の根本的書替へを行ふものであるとか、更には當時一九四三—四年のヨーロッパ第二戰線形成の問題に關連して、ソヴィエト學界をして、資本主義諸國に對し媚を呈せしめたものであるとかの、凡そ非科學的迷信的・見解と印象を一般に與へつゝあるから

再び『價值法則と社會主義社會の問題』に寄せて 四五 (五九九)

である。言ふまでもなく、それがソヴィエト經濟學の
つの發展であつたこと、乃至一つの發展を目標としたも
のであつたことは確かであるが、しかし果して轉換と言
はれるべきものであつたであらうか。マルクス經濟學か
ら「所謂近代經濟學」(それが果して學と呼ばれ得るに
値するか否か甚だ疑問ではあるが)への歩み寄を示すも
のであらうか。二つの經濟學をして「ベネローへの織機」
たることを止めしめ、協同作業の曠野を認められたものであ
らうか。

當時、モスクワに滞在中であつた明敏なる一人人記者
は言つてゐる。「昨年ソヴィエト政府の『ソ聯邦共産黨
史小教程』の新刊が出たが、これに對する批評が『マル
クス主義の旗の下に』誌上に出たところ、米國の一部評
論家達はこの論文から誠に奇怪な結論を導き出した」
(E. Snow "The Pattern of Soviet Power" 時事通信
社版三九—四〇頁、木下氏譯による)、そこで彼はモ
スクワにゐる間に約一萬語から成るこの論文を注意深く
讀み返してみても感想を次の如く述べてゐる。即ちこの
論文(レオンチェフ等の「經濟學教課上の諸問題につい
て」・「マルクス主義の旗の下に」誌一九四三年七月・八月

合併號所載論文を指す)は以前の牧歌的共産主義時代の
寧ろ曖昧な理論とは確然たる對照をなす明快なものであ
つて、結局わかり易く言へば、一九三六年の憲法で既に
明らかを示されたソヴィエト連邦に於ては支拂及貨銀は
出來高拂によるとの制度を單に再確認したに過ぎないも
のであると。そして更に、「然るに一部米國の評論家達
は、この論文からソ連がつひにその國內に於て資本主義
的經濟の採用を認められたにも等しいと言ふ結論を導き出
した。かれ等は簡單に『マルクス主義の旗の下に』誌の主眼
目を無視したのである」(同前、四〇頁)と記してゐる。
即ち米國學界は、ソ連紙の主張の眼目を無視して、激論
に花を咲かせた譯であるが、更に之を我國に再輸入・紹
介された都留氏は別として、更に鈴木武雄氏(『價值法
則と社會主義社會』・「世界」誌昭和二年二月號所載)、
がその二重・三重に主觀的歪曲の過程を経た都留氏の論
文をそのまゝに、その上に想像によつて議論を組み立て
られてゐるに至つては、たゞ／＼驚くの外はない。しか
し鈴木都留氏の論稿に對する批判は既に拙稿(『ソ連
邦における價值法則の變容について』・「世界經濟」誌三
月號)に於てその要點を採上げて置いたから本稿に於て

は觸れぬこととする。

先づ、ソヴィエト經濟學界更には全世界のジャーナリス
ムを賑わせた此の問題提起は、ソヴィエト經濟學の理論
的研究の立ち遅れを克服すべく、行われたと云ふ點——
或は又、別な言葉で言へば、その理論的再躍進を遂げる
可くなされたと言ふ點が極めて重要である。即ちソ連經
濟が多かれ少かれ全國民經濟的綜合計畫經濟實施に入つ
たのは第一次五年計畫(一九二八年十月より)以後の
ことであり、しかも尙農業部面はコルホーズ化完了の一
九三五年頃迄、小商品生産が残存してあり、尙本格的全
國民經濟計畫化の前提要件が備つてゐなかつた。然し一
九三〇年を前後として開始された農業集團化の狂瀾怒濤
の發展によつて計畫經濟の社會的前提要件は一應整備し
た。そして現實の社會主義社會の建設と共産主義社會へ
の移行が、その客觀的法則に従つて進捗し、發展せしめ
られつゝあるの一方、社會主義社會理論的解明を任務
とする社會主義の經濟學は歴史も淺く、發展も極めて遅
い。これが當時のソヴィエト經濟學界の指導的メンバ
達の卒直な意見であつた。従つて、社會主義社會の具體

再び『價值法則と社會主義社會の問題』に寄せて

的資料に基いて調査を進め、その發展法則、綜合的具體
的特徴を明らかにし、資本主義のそれよりもはるかに複
雜であり又、多角的であるところの社會主義經濟の發展
法則を複雑多岐に分析せねばならないことが要請され
た。(『ポリシエヴィク』誌、一九四六年一五號・卷頭
言)。
かゝる一般的理論的研究分野の自己反省として先づ問
題が提起されたことを、そしてそれが克服のためには現
實のソヴィエト社會の具體的統計的調査研究が要請され
たものであることを我々には忘れてはならない。それは、
都留氏が紹介された様に、又鈴木氏がそれに倣はれた様
に「價值法則は社會主義社會にも妥當するか」否かとい
ふが如き、近視眼的問題として提起されたものでは決し
てないのである。マルクス及びエンゲルスは、彼等が生
活し體驗した資本主義經濟の諸法則を専ら分析・解明し
た。そして過渡期及び社會主義の經濟の分析・解明は、
レーニン・スターリン及びそれ以後のソ連經濟學者達に
遺された課題である。經濟學が實踐的使命を擔つた經驗
科學たる以上、それは社會主義社會の建設とその發展を
見ることの出來なかつたマルクス・エンゲルス社會主義

の經濟學に關する多くを期待することは出来ない。そしてマルクス・エンゲルスに於て正統は軌路の上にその發展を開始した社會科學としての經濟學は、現代のソヴィエトの經濟學者達に依つて、社會主義の段階に於ける經濟學として發展せしめられねばならないのである。

然るにトライニン、オストロヴィチヤノフ等のソヴィエトの指導的學者の反省の言葉を借りて言ふなら「ソヴィエトの經濟學者たちの科學的研究は、ソヴィエトが到達した國民經濟の計畫的水準からも、又新五年計畫の示す巨大なる課題からも立後れている。現在迄、社會主義の經濟學の諸問題に關しての見るべき主要な勞作と言はるべきものは、何等行はれていない。又國民經濟計畫に關して黨が社會主義國家指導の下に行つて來た巨大な事業は、今日に至るもソヴィエト經濟學者の勞作に依つて、その理論的一般化が行はれていないのである」(ソ連邦科學アカデミー經濟法部門イズヴェスチヤ、一九四六年第五號、卷頭言。(然るに、社會主義の段階に於ては經濟學は至上の重要性を帯びる。即ち、ソヴィエト經濟の特質は、存在する經濟的諸法則が、人間の意志を規制する盲目的な力として、人間の上に君臨するものではない

くして、既に人間に依つて認識され、利用され、屈服せしめられた力として、社會主義建設の裡に、實踐的に意識的に利用せしめられるといふ點であり、従つて社會主義建設の實踐のうちに經濟的諸法則を織り込み、利用すると言ふことに精通することが、ソヴィエト社會主義體制の下に於ては、無上の意義を帯びることとなるのである。「此處に於て經濟學は……無上の重要性を帯び、國民經濟を意識的・計畫的に支配すべき唯一の道具と成るのである」(同前)。

さて、「ソヴィエト經濟學に新なる階程を設定するに至つた」といふ言葉の意味は、以上述べた様な含みを以て言はるべきであつて、ソヴィエト經濟學の新しい段階への躍進を示すものではないのである。日本の多くの學者は、この點を少しも諒解していない。

マルクスは『資本論』第一卷に於て、本源的資本蓄積を述べながら、資本制社會が小生産者の分解・資本と勞働力の市場の形成・私有財産制の確立と社會的分業の發展・國內市場の形成によつて、直接的小生産者の自然經

濟から轉化する發展の過程を詳細に分析している。即ち直接的小生産者の自然經濟の内部に萌す、社會的分業の發展は、生産手段の收奪と絡み合つて、商品經濟・資本制經濟發展のための國內市場を形成する。社會的分業の出現は必然的に商品生産を齎し、而して市場の大きさは社會的勞働の専門化の程度に正確に照應する(レニン「所謂市場問題のために」・ブレーガリ「マルクスの資本制的再生産論のレニンに依る發展」「經濟の諸問題」誌、一九四〇年第三號)。

即ち、資本制社會の成員は他人の爲の使用價值を、市場に齎し、自己自身の爲の使用價值と交換を行はなければならぬ。而して人間の諸勞働の均等性は、彼等の諸勞働生産物の同等な價值對象性といふ、物象的形態を採り、抽象的・社會的平均勞働としての價值が、此の商品交換市場の交換基準をなす。そして「社會的勞働の關連が個人的な諸勞働生産物の私的交換として行われる様な社會状態に在つては、かゝる比率的勞働配分の遂行せられる形態こそ、これら生産物の交換價值なのである」(マルクス)。即ち商品交換市場の交換基準たる人間の諸勞働の同等的價值對象性の具現者としての價值は、資本制

再び「價值法則と社會主義社會の問題」に寄せて

的商品生産社會に於て社會的諸勞働を「一定の比率に於て配分すべき盲目的」基準をなす。この配分基準の盲目的法則性は、商品相互間の諸關係を規制する「盲目的」法則として、人間相互間の諸關係を律するに至る。従つて、資本制社會の成員の各個は、斷えず或る一定の基準を中心として或は高く或は低く、變動する價格の變動に事後的に支配されつゝ、彼等夫々の商品生産を或は擴大し、或は縮少しつゝ、盲目的に彼等の社會的諸關係を調整し得るに過ぎない。然るに、利潤追及の至上命令を基準とする。資本制的私有財産制社會に於ては、生産者乃至資本家は、剩餘價値の生産、殊にその發展的上昇過程に於ける相對的剩餘價値の生産のための生産力發展を目標として、資本の有機的構成を漸次高度化せんとする衝動を常に與へられている。かくて「資本制社會は、そのあらゆる面に於て、同時に、均等に發展することは出来ない」(「年々の勞働の大部分は生産手段の生産のために投下される」(マルクス))。資本家階級に歸屬する社會的富の分前が、勞働者の腕から生産されつゝ、而も、常に増大の一路をたどる。「第一部門と第二部門との不均等的發展は、資本制經濟の基本的矛盾たる生産の社會的性質

と生産の結果の私的占有という矛盾の尖鋭化を表すと同時に、資本制社會内に於て進行する人民大衆の絶對的・相對的窮乏、富と貧困との不斷の擴大再生産、と關連する消費手段生産の緩慢な發展、對、生産手段生産の急速な發展、即ち生産と消費との間の矛盾の尖鋭化を表す。故に我々は資本制社會を規制する「盲目的」價值法則と、そして資本制的再生産に固有な矛盾、資本制社會の歴史的過渡的性格とその革命的顛覆の不可避性をみる。「この矛盾からして唯一の結論、抑制し難き力を持つた生産諸力の發展と言ふ事が、既に資本制が『アソシエイト』された生産者達の經濟に依つて代替されねばならないという結論をのみ、正しく齎すのである」(レーニン「經濟的プロレタリアン主義の特徵づけの爲に」)。かくて資本制社會を貫き規制する價值法則はそれが本來の盲目性の故に、破滅の必然の運命を擔はされているのである。直接的生産者達によつて營まれていた自然經濟の生産手段の收奪の結果としての資本制經濟は、市場の一層の擴張・發展、そして生れ出た個々の生産者達の孤立的無政府的性格のため、社會的生産諸部門間の適合性は、次第に不斷に破られるに至り、遂には周期的に資本制社會を根こそぎ揺

り動かすところの「恐慌」として、深刻に矛盾を兼ねた過程としての價值實現を自ら實證して居るのである。これは、第一部門と第二部門の不均衡性、従つて、消費と生産の發展の不均衡性、即ち資本家階級の擁する生産諸力の無制限の發展の傾向と、人民大衆のプロレタリア化・貧窮化・大衆的失業者群の生成の傾向との間の矛盾として、遂には生産諸力の壊滅・生産手段の社會的所有への移行の必然性を唯一つの針路として指示す。何故ならば、資本制的私的獨占的所有、又は國家的獨占所有は、之をよく救ひ得ぬものたるのみならず、「すべての資本制生産に固有な混亂を一般に、強化し、尖鋭化せしめる」(レーニン「帝國主義論」)から。

「一九世紀から、二〇世紀に掛けて周期的に反復されていた資本主義的擴大再生産の盲目的循環は、ソ同盟に於て社會主義國家により計畫的に決定される社會主義的擴大再生産の『循環』、即ちソ同盟國民經濟發展の五ヶ年計畫へと必然的に席を譲つた」(ヴォズネセンスキー、「ボリシェヴィク」誌、一九四〇年一號七七頁)。社會主義ソ同盟に於ては、經濟の發展は、國家の國民經濟計

畫によつて決定され指導される。而してこの國家的經濟計畫は、ソヴェト共產黨の強力な政治的權力を基礎に立つている。經濟的にも、技術的にもはるかに他國から後れ、從屬していた革命前のロシアが、一舉に先驅的なソヴェト國家に變形し、アメリカ合衆國と並んで世界の二大先進國と稱せられるに至り、強力なる獨逸ファシストを壊滅せしめたと言ふ事は、決して奇績ではあり得なかつたのである。第一次五ヶ年計畫當時、計畫遂行の驚く可き統計數字の發表は、諸外國、諸資本主義國の出版物に於て反對者の憤激を惹き起し、資本家陣營からは、五ヶ年計畫は「ボリシェヴィストの宣傳」であり、「チエカのペテン」(註)であると言ひ觸らされ、人々は奇績的な數字を前に、目と耳とを覆つたものであつた。然しながら、「ソヴェトには奇績も無く、又チエカも社會的發展法則を變改する程に強力なものではなかつた」(スクリン、一九四六年二月九日選舉演説、モスクワ版一四頁)のである。それは、客觀的經濟的發展法則に基いた客觀的眞理に過ぎなかつたのであつて、たゞ資本制社會に於て植え付けられた常識から見ての奇績に過ぎなかつたのである。と言ふ事は、やがて、第一次五ヶ年

計畫の成果としての工業化、農業の集團化、續く第二次第三次五ヶ年計畫の發表される結果、全同盟博覽會、等々、そして、獨逸ファシストの粉粹、戦後の復興・發展五ヶ年計畫の發表される四半期別、年度別の結果、などによつて實證される。今や、資本制社會の姑息な常識がら、人々の古い觀念が解放され、國際的な世界の新しい情勢へと、新しい經濟的發展法則へと人々の目と耳とが吸ひ寄せられつゝある事を感じないわけにはゆかない。社會主義社會を資本制社會から區別する唯一の根本的契機は生産手段の共同的所有を基礎とするといふ點である。社會主義のプロレタリアートの國家がその成員の代表者として、生産手段の唯一の所有者として現はれると同時に生産者の孤立性は消滅し、パースペクティヴ・プランに基く、人間の意志に依る經濟の支配が可能と成る、と言ふよりも寧ろ必要不可欠のものとなる。資本制社會に於ては偶然的性質しか有し得なかつた「計畫經濟」は社會主義經濟に於て必然に轉化する然しながら。社會主義經濟を計畫し、支配するところの人間の意志も「恣意」ではあり得ない。社會主義的生産様式は、それ自體として客觀的必然性に基く經濟的諸法則の作用を

再び「價值法則と社會主義社會の問題」に寄せて

受ける。たゞ資本制經濟に於ては無数の孤立せる傾向の集合として、事後調整的、盲目的に、即ち所謂「價值法則の作用によつて」景氣變動・恐慌・生産諸力の崩壊という過程を通じて貫徹していた經濟法則は社會主義社會に於ては、人間の認識と意志とを通じ、社會主義國家の手を通じて、恐慌や景氣變動という過程を経ずして、當該社會の内的・外的環境に依つて制約された經濟法則という形で現はれる。この點は本誌一、二月合併號所載拙稿「價值法則と社會主義社會の問題」に寄せて「八六頁以下にやゝ詳細に述べたから、以下省略する本稿では

「ソヴィエト同盟に於ては國家的國民經濟計畫が經濟の發達を決定し、指導するものである。共產黨の政策の徹底的實踐の上のみ、又國民經濟の計畫的運營の上のみ社會主義社會は形成され、又ソヴィエト國家の經濟的獨立性も保障される。……ソ同盟の社會主義計畫經濟は、數萬の企業を管理し、數千萬の労働者の労働を結合する。斯様な巨人的經濟有機體が恐慌なくして發展せんがためには生産が社會的需要と合致し、生産手段も社會の必要に應じて發展せしめられるという場合に限り、はじめて可能である。……」(「スターリン五ヶ年計畫」一九四六年ゴスプラン出版部、一四頁)。

四

五二 (六〇六)

さて以上の如く、人間の認識と意志とに依つて運營される社會主義經濟に於て、經濟學が前に述べた如く、非常に重要性を帯びる様に成るのは當然である。そしてこの「社會主義の經濟學」の問題に就て概括的理論的展望を最初に與へたものとしては、一九三八年九月、プラヴダ紙に十一回に亘つて連載され同年出版された「黨史小教程」中のスターリン執筆の第四章第二節「辯證法的・史的唯物論であり、そしてその中でスターリンが使つた言葉 The perfect concurrence between productivity power and productive relations in the Soviet Society」(ソヴィエト社會に於ける生産諸力と生産諸關係との完全なる適應)に關して、オストロヴィツァノフ(「經濟の諸問題」一九四〇年第三號)、ベレストネフ(「經濟の諸問題」一九四〇年五・六合併號)、ドヴォルキン(「マルクス主義の旗の下に」一九四〇年第六號)、ガトフスキー(「經濟の諸問題」第七號)等をはじめとして論議が展開せられ、戦時下の實踐的試練を経て、總結的結論として、レオンチェフ等の論文(「マルクス主義の旗の下に」一九四三年第七・八合併號)に至つたものと考へられる。しかしながら不幸にして筆者はこの間の理論的推移を詳細に研究し、發表するに充分な完全な資料を手に入れるに至つていないため、詳細は次の機会に於て、論じ度いと思つてゐる。

資料

生活研究の發生

——イデーデンの貧民の状態について——

中 鉢 正 美

「生活」と云ふ言葉には一般に様々の内容が含まれて居る。最も具體的には、夫は吾々各人が日々繰返して居る在りのまゝの生活體驗の總體を意味するであらうし、又やゝ抽象的には例へば政治生活、經濟生活、文化生活等々と云ふ様に、各個人又は各家庭が夫等のある一定の性格に於て寄り集り、一定の集團生活を營む事に依つて發生する生活の形を意味する場合もあらう。然し今此處では採り擧げようとして居る生活の意味は、最も具體的な各個人又は各家庭に日常繰返し行はれて居る生活の總體を指すものである。かゝる生活は唯夫丈に止つて居る限り其處に一般的な問題性の意識を生ずるものでは無いが、夫が何等かの性質に於て吾々の社會生活上に起りつゝある諸問題のあるものと密接な關係に在る事を意識さ

イデーデンの貧民の状態について

五三 (六〇七)

れるに至るや、日常生活の此の性質は始めて公共の問題として自覺されるに至る。勿論此の場合生活問題としてよりは、むしろ一個の社會問題として夫が採り擧げられるであろう事は容易に考へられる。生活問題は、かゝる社會問題がその社會を構成する人々の日常生活に結びついて居る部分丈を採り擧げる場合に判然と意識され、従つて問題意識の發生過程としては社會問題は生活問題に先行すると云へよう。勿論その社會問題夫自身は多分に各人の日常生活を通じて意識されるであらうが、而も夫はあく迄社會生活の問題としてのみ意識され、夫が本質的には各人の日常生活の諸性質の内に原因を潜ませて居るのだと云う自覺は未だ表面に現れては來ないのである。然し問題意識としては生活問題と社會問題とが分離し